Ⅴ　古代の遺構と遺物

―奈良時代―

古代の検出面（図 181 左）は、標高 6.9m前後の青灰色粘質土層であり、ほぼ水平に堆積する。この層の上層は黒褐色土層であり、東側の方へ徐々に薄くなっている。この層をさらに３層に分類できたが、遺構面として把握することはできなかった。この黒褐色土層の３面目は黒褐色土と青灰色土が混在する柱穴掘りかたの埋土を覆って堆積するため、旧生活面の掘削を伴う整地土と解釈した。この層からの出土遺物は、調査区の遺物の９割を占める。ただし、出土遺物は７～９世紀代の時期のものであり、出土範囲が一部の地区に限定できる。そのため、古代の遺構面は古墳時代の遺構面より高かったと推測できる。また、９世紀代に行ったであろう整地は、僅かな高低を平坦にした地ならし程度の整地と推測する。

周辺の地理的状況を推定すると、北・西側には平野が広がり、南・東側には河川が流れる状況となる。調査区の東側は吉野川の推定流域であり、実際に百間掘対岸の東側調査区およびその更に東側の福井駅周辺部において、古代の遺構は存在しなかった。古代の検出面の土層観察においても河川付近で 0.2m 程度下がるため、旧吉野川の氾濫の及ばない自然堤防的地形上に位置していたと推定できる。このような立地状況であるため、本調査区域は遺跡の周縁部にあたると考えられ、本調査区よりも西側もしくは北側に遺跡の中心部を想定したい。

古代面は、複数の地区に分割して調査を行ったため、調査時に遺構の関連性を認識することが困難であった。他に古墳時代の遺構も同一面上で検出しているが、遺構出土遺物・主軸の方向・建物の規模と配置などから古代期に該当する遺構を抽出した。遺構は、掘立柱建物７棟・柵列４条（２組）・溝２条である（図 181 右）。これらの遺構には方向の類似性がある。

本調査区の遺物のほとんどを占めるのは、Ｃ７・８・９区の包含層中から出土しているものである。整地による遺物の移動は僅かと考えるため、出土した区画を重要視したい。

したがって、以下の報告は、遺構は方向の類似性による分類を重視し、遺物は出土地点による分類を重視する。

１．遺　構

建物の範囲が重複するＳＢ01 とＳＢ04 は、ＳＢ01 の柱根が遺存していることから、ＳＢ04 の後にＳＢ01 が建てられたと想定できる。

これを踏まえて各遺構を方向的に分類すると、方位Ｎ５～10°Ｗに属する若干西寄りの一群と、方位Ｎ２～３°Ｗに属する真北に近い一群に分けられる。前者にはＳＢ04（Ｎ５°Ｗ）・ＳＤ02（Ｎ５°Ｗ）・ＳＢ06（N7.5°Ｗ）・ＳＤ01（Ｎ８°Ｗ）・ＳＡ01（N10°Ｗ）が該当し、後者にはＳＢ01（N2.5°Ｗ）・ＳＢ02（Ｎ３°Ｗ）・ＳＢ03（Ｎ３°Ｗ）・ＳＢ05（Ｎ２°Ｗ）が該当する。ＳＢ04 が時期的に先行するため、前者を前段階、後者を後段階とした。前段階では、西側にＳＢ04、中央部にＳＤ02・ＳＤ01・ＳＡ01、東側にＳＢ06 が配置される（図 182 左）。後段階では、西側にＳＢ01・ＳＢ02・ＳＢ03・ＳＢ05 といった建物が集中的に配置される（図 182 右）。

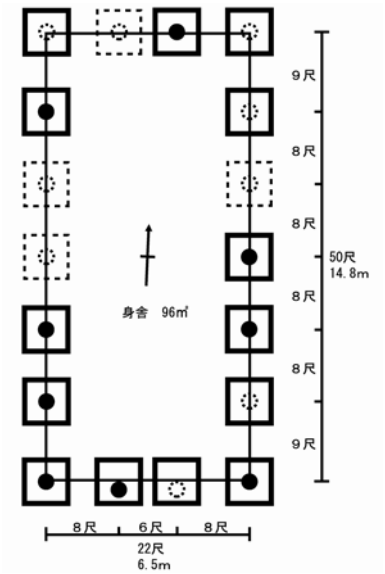
図181　奈良時代の遺構①（S＝1/500）

図182　奈良時代の遺構②（S＝1/500）

以下、遺構を個別詳述する。尺については、令小尺を0.296mとして計算し、0.5尺刻みでより近い値に振り分けた。桁行・梁行の設定は、柱根が遺存したＳＢ01はそれに従い、それ以外は柱痕跡もしくは柱掘りかたの中心を通ることを優先し、桁行と梁行が直角になるような平面規格をもとに推定した。

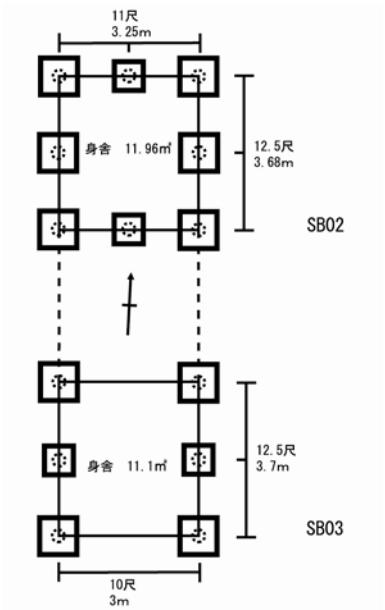
掘立柱建物

ＳＢ01(図183)　ＳＢ01は調査区の西部に位置し、桁行６間(14.8m、50尺)、梁行３間（6.5m、22尺)、面積96.4㎡の南北棟（N 2.5°W）の側柱建物である。桁行の柱間寸法は、中央４間は８尺等間、両端間は９尺である。梁行の柱間寸法は、中央間は６尺間、両端間を８尺である。桁行と梁行ともに両端部が長い。柱掘りかたは方形を呈し、長軸1.1～1.3m、短軸0.9～1.1m、検出面からの深さ約 0.8mを測る。四隅の柱穴は大きく深い。南側中央の柱穴（２-417・２-418）は浅く、検出面からの深さ 0.2mを測る。柱根が一部の柱穴（９-236・９-244・４-862～864・２-416・２-419）で遺存しており、柱径は約 0.3mを測る。南側中央の柱根（２-417・２-418）は両端の柱筋から１尺ほど南側に位置し、それ以外の柱は柱筋の通りがよい。



ＳＢ01は、調査時期の異なる３地区で検出した。北側半分は後世の削平の影響が強い区域であったため、北側から３番目の両側の柱穴を検出できず、柱穴の関連性を求めるための情報が不足している。ただし、桁行の中央４間が等間推定可能であり、桁行・梁行の両端間の柱間寸法が長く、四隅の柱穴の規格が他より大きいというように、１棟の建物規格を意識した地割のためと評価できる。そのため、これらを一連の遺構群をＳＢ01として報告する。

ＳＢ02・ＳＢ03（図184）　ＳＢ02は調査区の中央西側北部に位置する。ほぼ正方形の規格であるが、中央の柱穴が小さい方を梁行とした。桁行２間（3.68m、12.5 尺)、梁行２間（3.25m、11尺)、面積 11.96 ㎡の南北棟（Ｎ３°Ｗ）の側柱建物である。柱掘りかたは方形を呈し、長軸0.5～1.3m、短軸0.6～0.7m、検出面からの深さ約 0.35～0.5mを測る。梁行の中央の柱穴は、平面規格が小さく、深さも0.2mと浅い。

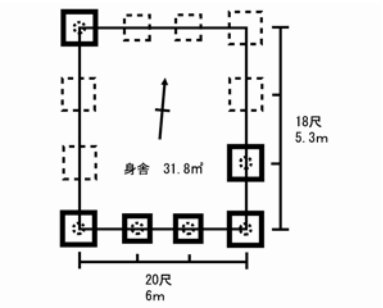


ＳＢ03は調査区の中央西側南部に位置する。ＳＢ03の南側は調査区外になるため南端は不確定であるが、北側は柱穴が存在しないため北端は確定している。これら遺存した柱穴から建物規格を推定し、長辺を桁行、短辺を梁行とした。桁行２間（3.7m、12.5尺)、梁行１間（３m、10尺)、面積11.1㎡の南北棟（Ｎ３°Ｗ）の側柱建物である。柱掘りかたは方形を呈し、長軸 0.7～0.9m、短軸0.5～0.6m、検出面からの深さ約0.5mを測る。桁行の中央の柱穴は、平面規格が小さく、深さも0.25mと浅い。

ＳＢ02とＳＢ03は、ほぼ同一規格であり、南北柱筋がほぼ一直線上に並ぶ。また、ＳＢ02南端とＳ

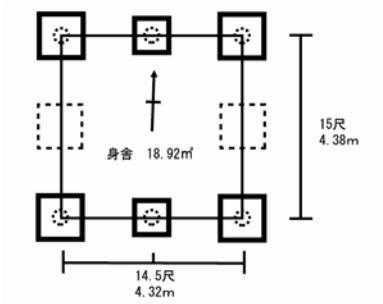
B03 北端は６ｍの間隔があるため、両建物の間がＳＢ02・03 規格で１棟分空いていたと推測する。このように、建物および間隔が同一規格で棟通りを揃えていることから、同時期における一つの計画の中で造営された建物群と判断であろう。

ＳＢ04（図 184）　ＳＢ04 は調査区の西部に位置する。中央の柱穴が小さい方を梁行とした。桁行の柱穴は同規格になると推定できる。桁行３間（5.3m、18 尺）、梁行３間（６ｍ、20 尺）、面積 31.8 ㎡の南北棟（Ｎ５°Ｗ）の側柱建物である。柱掘りかたは方形を呈し、長軸 0.35～0.6m、短軸 0.45～0.55m、検出面からの深さ約 0.3mを測る。



ＳＢ04 は、北側の梁行および桁行の柱穴を完全に検出できなかったため桁行の長さが不確定ではあるが、遺存していた柱穴の間隔から桁行３間と推定する。

ＳＢ05（図 184）　ＳＢ05 は調査区の西端部に位置する。ほぼ正方形の規格であるが、中央の柱穴が小さい方を梁行とした。ただし、桁行と梁行の柱列が直角ではないため、建物の平面形がいびつになる。桁行の長さに対して１間では間隔にやや開きがあることから、ＳＢ02・03 の状況を踏まえて、それぞれ別棟の梁行として２棟の建物が桁行方向に直線的に配置された可能性も推測できる。しかし、ここでは建物の中央部が後世に撹乱されているため、遺構が削平されてしまった可能性がある。このような状況から、１棟の建物として報告する。１棟に想定した場合には桁行２間であったと推測する。



このように想定したＳＢ05 は、桁行１（２）間（4.38m、15 尺）、梁行２間（4.32m、14.5 尺）、面積 18.92 ㎡の南北棟（梁行計測　Ｎ２°Ｗ）の側柱建物である。柱掘りかたは方形を呈し、長軸 0.4～0.95m、短軸 0.35～0.7m、検出面からの深さ約 0.55mを測る。

ＳＢ06・ＳＢ07（図 184）　ＳＢ06・ＳＢ07 は調査区内で１列の柱穴の検出にとどまるが、柱穴の規格から建物として報告する。

ＳＢ06 は調査区の東部に位置する。柱穴列の東西に柱穴が存在しないため、これを梁行とした。梁行２間（3.3～3.6m、11～12 尺）の南北棟（N7.5°W）の掘立柱建物である。柱掘りかたは方形を呈し、長軸 0.8～0.9m、短軸 0.6～0.7m、検出面からの深さ約 0.5～0.6mを測る。

ＳＢ07 は調査区の中央西側北端部に位置する。柱穴列の東西に柱穴が存在しないため、これを梁行とした。梁行２間（３ｍ、10 尺）の南北棟（Ｎ２°Ｅ）の掘立柱建物である。柱掘りかたは方形を呈し、長軸 0.6～1.1m、短軸 0.5～0.7m、検出面からの深さ約 0.2mを測る。柱穴が等間隔ではない。

ＳＢ07 はＳＢ02・03 の北側に桁行の軸を揃えて位置し、梁行の長さがＳＢ03 と同じである。これらから桁棟を揃える状況が想定できるため、同時期計画の造営建物群の可能性はある。しかし、ＳＢ07 は、建物の方向が若干異なり、建物北側は調査区外に及び検出できなかった理由などから建物規格として不確定な要素が多い。そのため、現段階では桁棟を揃える建物が存在する可能性の指摘にとどめる。

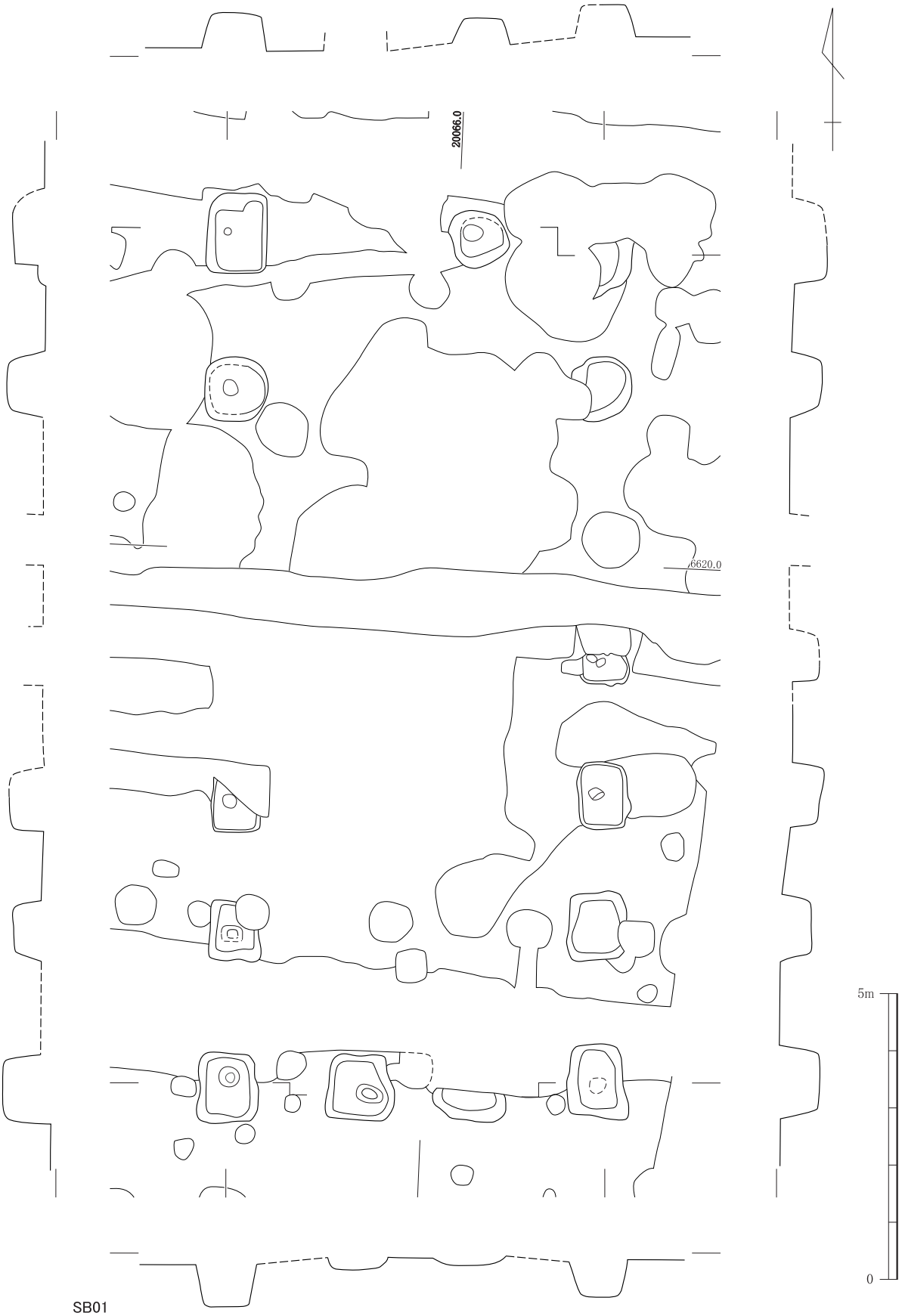


図183　建物①（S＝1/100）

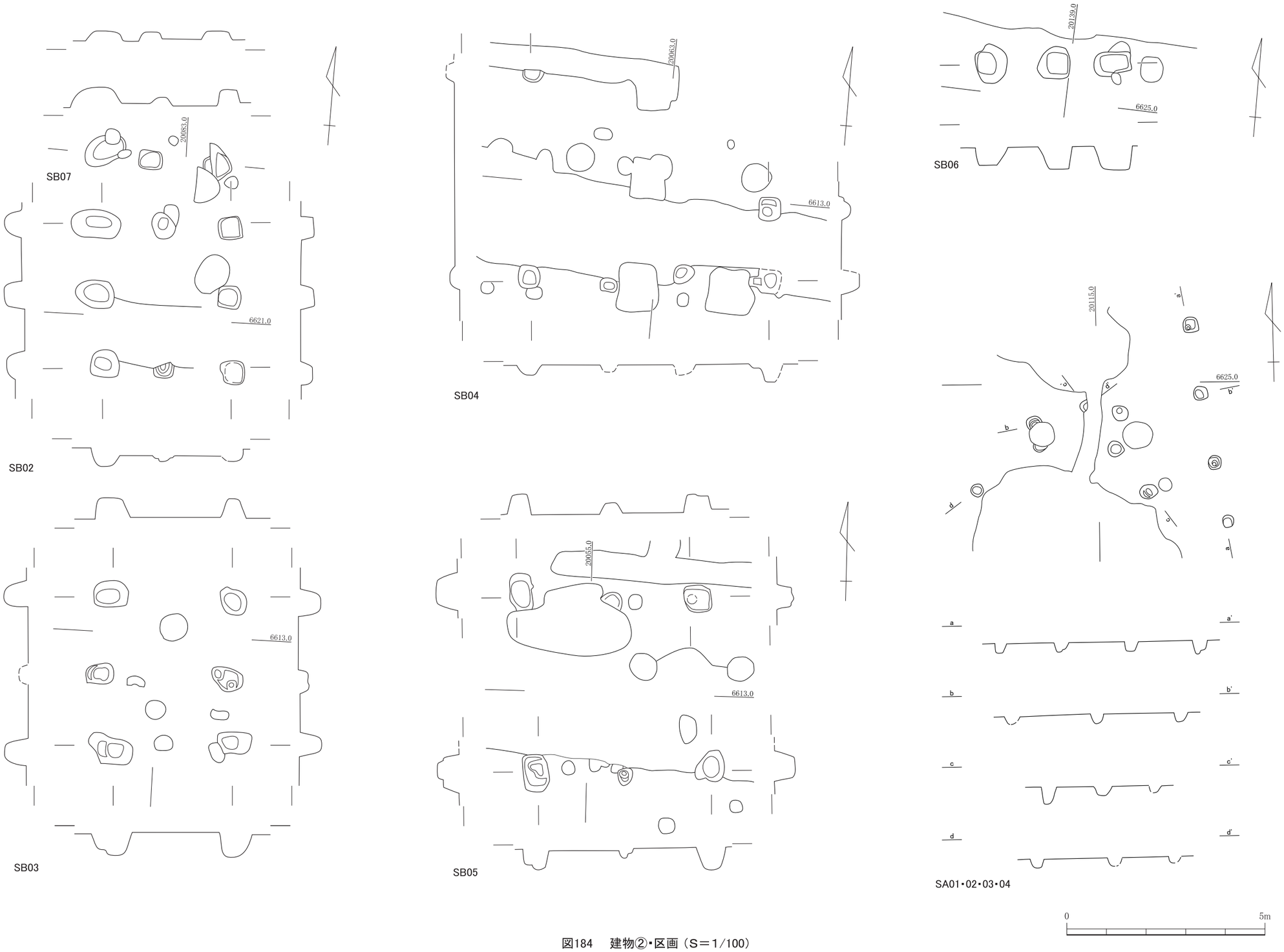


図184　建物②・区画（S＝1/100）

柵列遺構

ＳＡ01・02・03・04（図 184）　柵列遺構（ＳＡ01・02・03・04）は調査区の中央北部に位置する。これらは直線軸により細分しているが、ＳＡ01とＳＡ02は直角に配置されているため同一の上部構造を形成していたと判断する。 ＳＡ03とＳＡ04も同様である。それぞれの方位は、ＳＡ01が N10°Ｗ 、ＳＡ03が N37°Wを測る。ＳＡ03は調査区内遺構の方向と大幅に異なるため、時期差を考慮する必要がある。いずれの柱掘りかたも方形を呈し、一辺30～35ｃｍ、検出面からの深さ約0.2～0.25m・0.4m（ＳＡ03南端のみ）を測る。

各柵列の間隔は、ＳＡ01は３間（５m）、ＳＡ02は２間（4.35m）、ＳＡ03は２間（2.65m）であり、これらの柱痕は等間隔で配置する。ＳＡ04は２間（1.5mと２m）と柱痕の間隔が異なる。

溝遺構

ＳＤ01・02（図182左）　溝遺構は、方位がほぼ同じの２条の溝を検出した。ＳＤ01は調査区の中央部に位置し、幅約0.5m、検出面からの深さ0.15m、方位Ｎ８°Wを測る。ＳＤ02は調査区の東部に位置し、幅約0.3m、検出面からの深さ0.05m、方位Ｎ５°Wを測る。これら２条の溝の間隔は19.2m（65尺）を測る。

小　結

ＳＢ01は調査区内で最大規模の建物である。四隅の柱穴が大きく、等間尺の柱間寸法であり、柱筋の通りがよいことは、精密な設計をもとに建てられていると評価できる。この建物の規模から推測すると、後述するように越前地域においても極めて大きい部類に属するため、周辺建物の中心的役割を担ったのであろう。

ＳＢ02とＳＢ03は、桁棟を揃えて並ぶ同一規格の建物である。ＳＢ07は不確定要素が多いが、ＳＢ02・ＳＢ03に桁棟を揃える同一規格の建物である可能性がある。これらを一連と評価した場合には、桁棟を揃えて建物が配置されていたと考える。

ＳＢ04は調査区の建物柱穴としては最小の規格である。桁行の長さが不確定ではあるが、平面規格は大きい。調査区内においてＳＢ01とＳＢ04の２棟のみが、梁行３間である。これらの梁行長は、他の建物の約２倍を測ることからも、梁行を長くするために３間に増やしたと考える。つまり、この２棟は通常よりも大きな内部空間を必要としたと推測できる。また、このような類似性とともに、建物の範囲が重複することから、ＳＢ04からＳＢ01に建て替えられた可能性がある。

ＳＢ05は桁行と梁行が直角ではないため、１棟と想定した場合にはいびつな平面形になる。また、２棟の建物が桁行方向に配置された可能性もある。ＳＢ06・ＳＢ07は梁行１列の検出にとどまる。

前段階の方位Ｎ５～10°Wに属する遺構は、全てを同じ時期と判断するのには情報が不足している。そのなかでも中央部の柵列と溝は、方位と範囲がまとまることから関連性が高いと判断する。東側に旧吉野川が流れていた状況から、遺跡の外縁的区画と評価し、東側の遺構の希薄性はこれを補足するものとしてもよいと考える。

後段階の方位Ｎ２～３°Wに属する建物群は、計画的な配置状況であることから、極めて関連性の高い一群と評価する。これらの方位は、条里制の南北線と同じである。そのため、この計画的配置は条里制的区割りが重要視された結果と判断する。　（釘谷）

２．遺　物

出土遺物の中から器種特定が可能な残存状態のもの 75 点を図化した。遺物の器種は、食膳具・貯蔵具（須恵器質）・煮炊具（土師器質）・その他に大別した。これらの器種構成比率は、食前具 76%（57 点）・貯蔵具 17.3%（13 点）・煮炊具 2.6%（２点）・その他４％（３点）である。食膳具には須恵器と土師器があり、その割合は 2.66：１である。食膳具の須恵器器種は坏蓋・有台坏・無台坏・無台皿・高坏があり、土師器器種は有台埦・有台皿・無台坏・無台皿・高坏がある。貯蔵具は、大甕・甕・広口壺・横瓶・長頸瓶・広口瓶がある。煮炊具は甕がある。その他の器種は、灰釉陶器・黒色土器・鉄鉢・円面硯・円形陶製品がある。

遺構から出土した遺物は極めて少なく、図化できたものはＳＢ01 出土の遺物３点のみである。調査の制約上、この３点の遺物も、柱穴もしくは柱掘りかたのどちらから出土したのか判断できなかった。それ以外の遺物の、なかでもＣ７・８・９区から出土したものは、先に述べた整地土層から出土したものである。これらの数量傾向をみると、Ｃ８区からが全体数の６割強を占め、Ｃ７・８・９区では９割弱を占める。そこで出土区画ごとにＳＢ01、ＳＢ01 展開域のＣ８区、その周辺域のＣ７・９区、その他の区域の４区分で遺物報告をする。

ＳＢ01 出土遺物

ＳＢ01 柱穴出土遺物は、食前具の須恵器無台坏１点・土師器無台坏１点・土師器有台埦１点である。

無台坏（図 185-１）　須恵器。平底から口縁部が直線的に開き、口縁端部に面取りする器形。底部外面にヘラケズリ、体部下部と口縁端部に沈線を施す。このような形状と調整は、本地域においては特殊である。

無台坏（図 185-２）　土師器。平底から口縁部が内弯しつつ開く器形。口縁部にヨコナデを施し、底部は無調整である。全面に赤彩を施す。

有台埦（図 185-３）　土師器。平底から口縁部が内弯しつつ開き、高台が付く器形。口縁端部に面取りを施す。著しい摩滅で調整は不明である。

Ｃ８区出土遺物

Ｃ８区出土遺物は、食膳具 35 点・貯蔵具７点・煮炊具１点・その他４点である。

食 膳 具（図 185-４～25、図 186-26～38）

須恵器の器種は、坏蓋６点・有台坏２点・無台坏 14 点・無台皿１点・高坏１点がある。

坏蓋（４～９）　有返蓋・有台坏蓋がある。有返蓋（４・５）尖り形状のつまみが付き、口縁部内面にかえりが付く器形。４は口縁部を欠損する。５は天井部中央を欠損する。有台坏蓋（６～９）扁平形状のつまみが付き、平坦な天井部から口縁部が直線的に開く器形。６は全体的に丸みを帯びる。降灰により調整は不明瞭である。７・８は天井部にケズリ、口縁端部に面取りを施す。９は天井部中央を欠損する。口縁部が外反する。

有台坏（10・11）　底部から丸みを帯びつつ立ち上がり口縁部が直線的に開き、高めの高台が付く器形。10 は口縁端部が僅かに外反する。11 は、底部から口縁部がやや内弯しつつ開く器形。口縁端部欠損のため不確定であるが、稜埦形の可能性もある。

無台坏（12～24）　内弯器形、外反器形、直線器形がある。内弯器形（12～19）底部から口縁部が内弯

しつつ開く器形。丸底（12・13）と平底（14～19）がある。いずれも底部はヘラ切り無調整である。12の口縁部には沈線が巡る。15～17は口縁端部を外反させる。16は底部が非常に分厚い深身器形。有台坏11と同一胎土である。17は内面に漆が付着する。外反器形（20・21）平底から口縁部が丸みを帯びつつ開き、口縁端部が外反する器形。底部内面の口縁部立ち上がり部に強い回転ナデを施す。直線器形（22～24）平底から口縁部が直線的に開く器形。22は底部と体部がほぼ同じ厚みで、口縁部が僅かに外反する。24は小型。25は底部を欠損する内弯器形である。

無台皿（26）　平底から口縁部が内弯しつつ開き、口縁端部が外反する器形。

高坏（27）　口縁部と脚部を欠損する。口縁部の立ち上がり方から、坏形と推測する。

土師器器種は、有台皿１点・無台坏４点・無台皿５点・高坏１点である。

有台皿（28）　やや高く接地面の広い高台が付く器形。体部を欠損する。底径から皿と判断した。全面に赤彩を施す。

無台坏（29～32）　大型（29・30）と小型（31・32）がある。29は口縁部が内弯しつつ開く器形。底部を欠損する。30は平底から口縁部が丸みを帯びつつ直線的に開く深身器形。31・32は丸みを帯びた底部から口縁部が内弯しつつ開く器形。32は口縁端部を僅かに外反させる。29～31は内面に放射暗文を施す。31の暗文は左上がりである。30～32は全面に赤彩を施す。29は口縁部外面をヨコナデし、その下半部にケズリを施す。30・32は口縁部外面をヨコナデし、底部は無調整である。31は摩滅のため調整不明である。

無台皿（33～37）　丸底（33・34）と平底（35～37）に形態分類する。33・34は丸みを帯びた底部から口縁部が内弯しつつ開く器形。35～37は平底から口縁部が内弯しつつ開く器形。35は口縁部内面に浅い沈線がある。36は口縁端部を僅かに外反させる。33・34・36・37は全面に赤彩を施す。34は内面に放射暗文を施す。37は内面に放射暗文と螺旋暗文を施す。34は口縁部をヨコナデし、底部にケズリを施す。35・37は口縁部をヨコナデし、底部は無調整である。35は底部内面にミガキを施す。33・36は摩滅が著しく調整不明である。

高坏（38）　口縁部を欠損する。残存部の立ち上がりから皿形と推測する。坏部内面にはミガキを施す。全面に赤彩を施す。

貯 蔵 具（図186-39・40、図187-41～45）

貯蔵具は、甕３点・壺２点・横瓶１点・長頸瓶１点がある。

甕（39～41）　39は大甕の口縁端部。下部から２条の沈線、波状紋を施す。40はくの字に外屈する口縁部で、体部を欠く。41 は弱く外屈する口縁部で、体部下半を欠く。口縁部の屈曲部にはカキメがあり、外面の口縁部と体部の屈曲部に沈線を施す。40・41は口縁端部内側に僅かなかえりがある。体部はタタキ成形する。

壺（42・43）　42は広口壺の外反する口縁部で、端部を外屈する。43は嘴状高台が付く底部から内弯しつつ立ち上がる体部である。外面はケズリ、内面はナデ調整する。

横瓶（44）　外反する口縁部で端部に面取りを施す。体部下半を欠く。体部はタタキ成形する。

広口瓶（45）　体部から口縁部がくの字状に付く器形。体部下半を欠く。内外面をナデ調整する。

煮 炊 具（図187-46）

煮炊具は、甕１点である。

甕（46）　口縁部がくの字状に外屈する。体部を欠く。

そ の 他（図 187-47～50）

その他の遺物は、黒色土器有台椀１点・土師器鉄鉢１点・円面硯１点・円形陶製品１点がある。

黒色土器（47）　糸切りの底部に高台が付く。内面に黒化処理を施す。

鉄鉢形土器（48）　土師器。口縁端部を外屈する。内外面とも赤彩を施す。

円面硯（49）　低圏足硯。底部の端部に面取りを施し、内側に僅かなかえりがある。筆立ては円孔が小さすぎるため、装飾的に形骸化したものを付けたのであろう。

円形陶製品（50）　縁部に面取りを施し、中心に穿孔する。紡錘車の破片であろうか。

Ｃ７・９区出土遺物

Ｃ７・９区出土遺物は、食前具・貯蔵具・煮炊具・その他がある。

食 膳 具（図 187-51～59、図 188-60～62）

須恵器器種は、坏蓋５点・有台坏４点・無台坏１点・高坏１点がある。

坏蓋（51～55）　無鈕蓋・有返蓋・有台坏蓋がある。無鈕蓋（51）丸みを帯びた天井部から口縁部が内弯しつつ開く器形。天井部調整はヘラ切り後中央以外にケズリを施す。有返蓋（52）天井部を欠損する。口縁部内面にかえりが付く器形。有台坏蓋（53～55）扁平形状のつまみが付き、平坦な天井部から口縁部が直線的に開く器形。54 は全体的に丸みを帯びる。56 は鈕を欠損する。

有台坏（56～59）　底部から口縁部が直線的に開く器形。56 は口縁端部が僅かに外反する。58 は口縁下半部分で内側に屈曲し、口縁端部が僅かに外反する。内縁が接地する厚い高台が付く。59 は口縁部を欠損する。底部から内弯しつつ立ち上がる。端部が外反する薄い高台が付く。

無台坏（60）　平底から口縁部が丸みを帯びつつ直線的に開く器形。

高坏（61）　口縁部を欠損する。残存部の立ち上がりからおそらく坏形と推定する。

土師器器種は、椀１点である。

椀（62）　底部を欠損する。口縁部は内弯しつつ開き、口縁端部が外反する器形。摩滅が著しいため不明確であるが、全面に赤彩される。

貯 蔵 具（図 188-63・64）

貯蔵具は、甕１点・瓶１点である。

甕（63）　くの字に外傾する口縁部。端部に面取りを施す。

瓶（64）　肩部が内側に屈曲する体部片。肩部には沈線を施す。内面に漆が付着する。

煮 炊 具（図 188-65）

煮炊具は、甕１点である。

甕（65）　強く外反する口縁部。外面に赤彩を施す。

そ の 他（図 187-66）

その他の遺物は、灰釉陶器壺１点である。

灰釉陶器（66）　外反しつつ開く壺の口縁部で、端部に面取りを施す。

その他の区域の出土遺物

食 膳 具（図 188-67～71）

須恵器器種は、有台坏１点・無台坏２点・無台皿１点である。

有台坏（67）　底部から口縁部が外反しつつ開く器形。

無台坏（68・69）68 は、やや尖り底から口縁部が直線的に開く器形。69 は、平底から口縁部が丸みを帯びつつ開く器形。

無台皿（70）　平底から口縁部が直線的に開き、口縁端部がやや外反する器形。

土師器器種は、無台皿１点である。

無台皿（71）　平底から口縁部が丸みを帯びつつ開き、口縁端部が僅かに外反する器形。

貯 蔵 具（図 188-72～75）

貯蔵具は、甕２点・壺１点・瓶１点である。

甕（72・73）　72 は大甕の口縁端部。下部から波状紋、２条の沈線、波状紋が施される。焼成不良である。73 は口縁部。体部から「く」の字に外屈し口縁部に至る。口縁端部に面取りを施す。

壺（74）　口縁部。外反しつつ開き、口縁端部を面取りする。

瓶（75）　体部。高台が付く底部から内弯しつつ立ち上がる。底部内面の調整が荒い。

小　結

須恵器食膳具の出土器種は、無鈕蓋、有返蓋、有台坏蓋、有台坏、口縁直線形の無台坏、口縁端部外反形の無台皿、高坏がある。有台坏蓋は、扁平形状のつまみが付く口縁端部笠形形態がほとんどであり、端部が弯曲する個体もある。有台坏は、高めの高台が付く口径 18 ㎝の個体と、低い高台が付く口径 14 ㎝前後の個体がある。無台坏は、口径 12～14 ㎝・径口指数 25～32 を測る個体が多い。口縁内弯形の無台坏は丸底と平底があり、深身の個体や口縁端部が外反する個体もある。

土師器食膳具の出土器種は、須恵器器形の有台皿、口縁内弯形の大型の有台坏・無台坏、口縁直線的な深身の大型の無台坏、丸底で口縁内弯の小型の無台坏、丸底と平底の無台皿、口縁端部外反の椀、坏形の高坏がある。坏・皿は、暗文を持つ個体が半数近くある。暗文の種類はすべて放射暗文であり、さらに螺旋暗文も施す個体もある。調整手法は、口縁部外面ヨコナデで底部無調整の個体が多く、底部にケズリを施す個体もある。これらは、土師器特有の技法によって製作された個体である。他方、須恵器の製作技法によって製作された個体もある。これらは全面赤彩の個体が多い。

貯蔵具は、壷、甕、長頸瓶、横瓶、広口瓶、広口壷がある。瓶類が比較的多い。口縁部のみであるが、大甕が存在する。

煮炊具は、甕のみである。外面に赤彩を施すものもある。

その他の特殊品として、赤彩を施す土師器鉄鉢と円面硯がある。

本調査区のほとんどの遺物は、包含層出土である。この包含層は地ならし程度に旧生活面を掘削し、遺物の散乱状況からそれほど広範囲に土を広げた様子はない整地土である。特に土師器食膳具の出土がＣ８区の包含層に限定されることは、整地に伴う土の移動が少なかったことを示すものであろう。

また、ＳＢ01 の柱穴からのみ土師器食膳具が出土していることも一つの傍証となるが、柱痕跡と柱掘りかたのどちらから出土したのか確実ではないため、これを根拠に推測することはできない。ただし、Ｃ８区のＳＢ01 の柱穴から遺物が出土している状況と、そのＣ８区の包含層から遺物が多く出土している状況から、柱の腐朽による陥没穴に上層の土が流入したために柱痕跡から出土したという可能性が高いように思える。このような状況の場合には、すべての遺物が整地土層内に包含されていたということになる。　（釘谷）

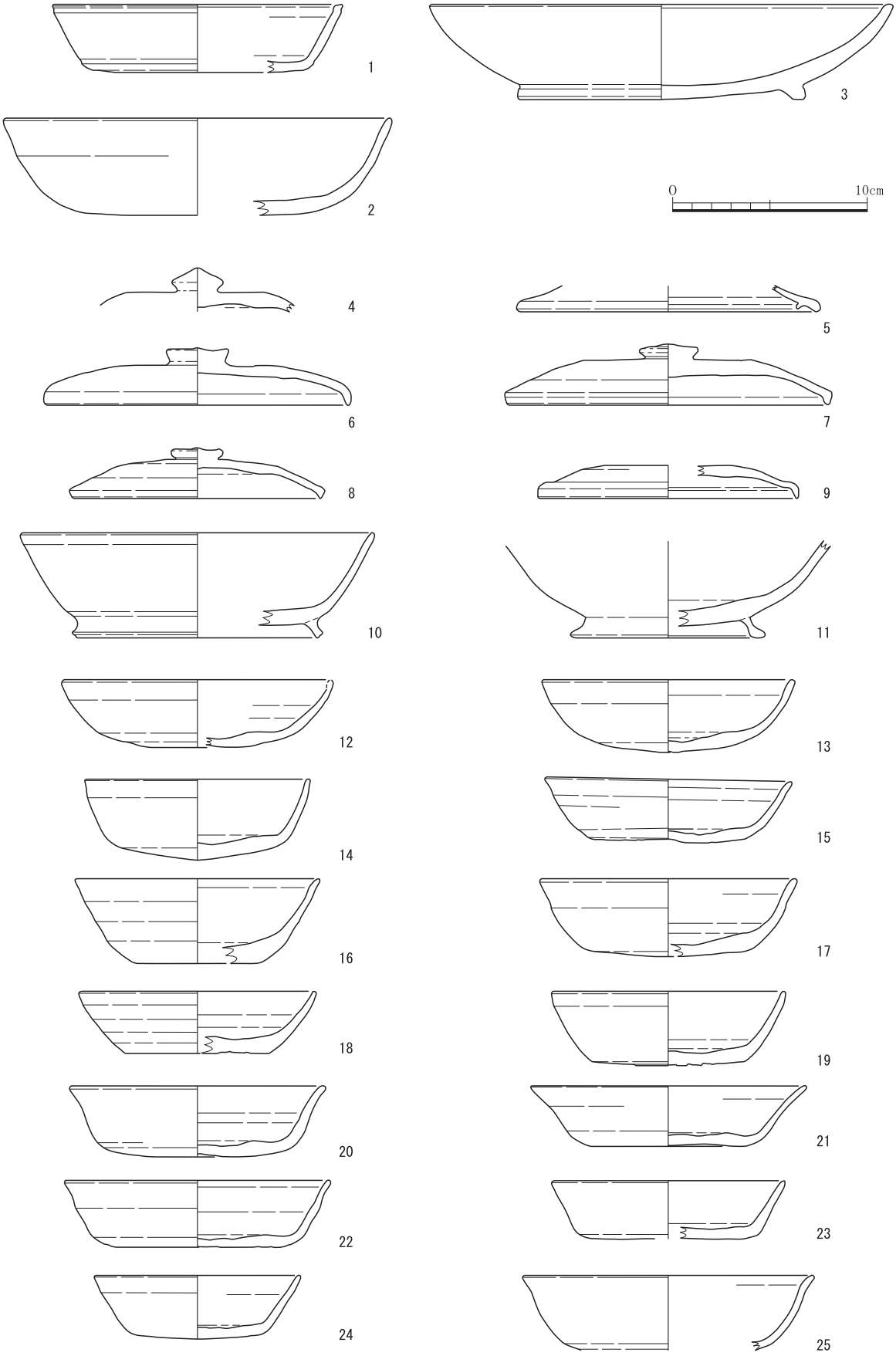


図185　土器①（S＝1/3）

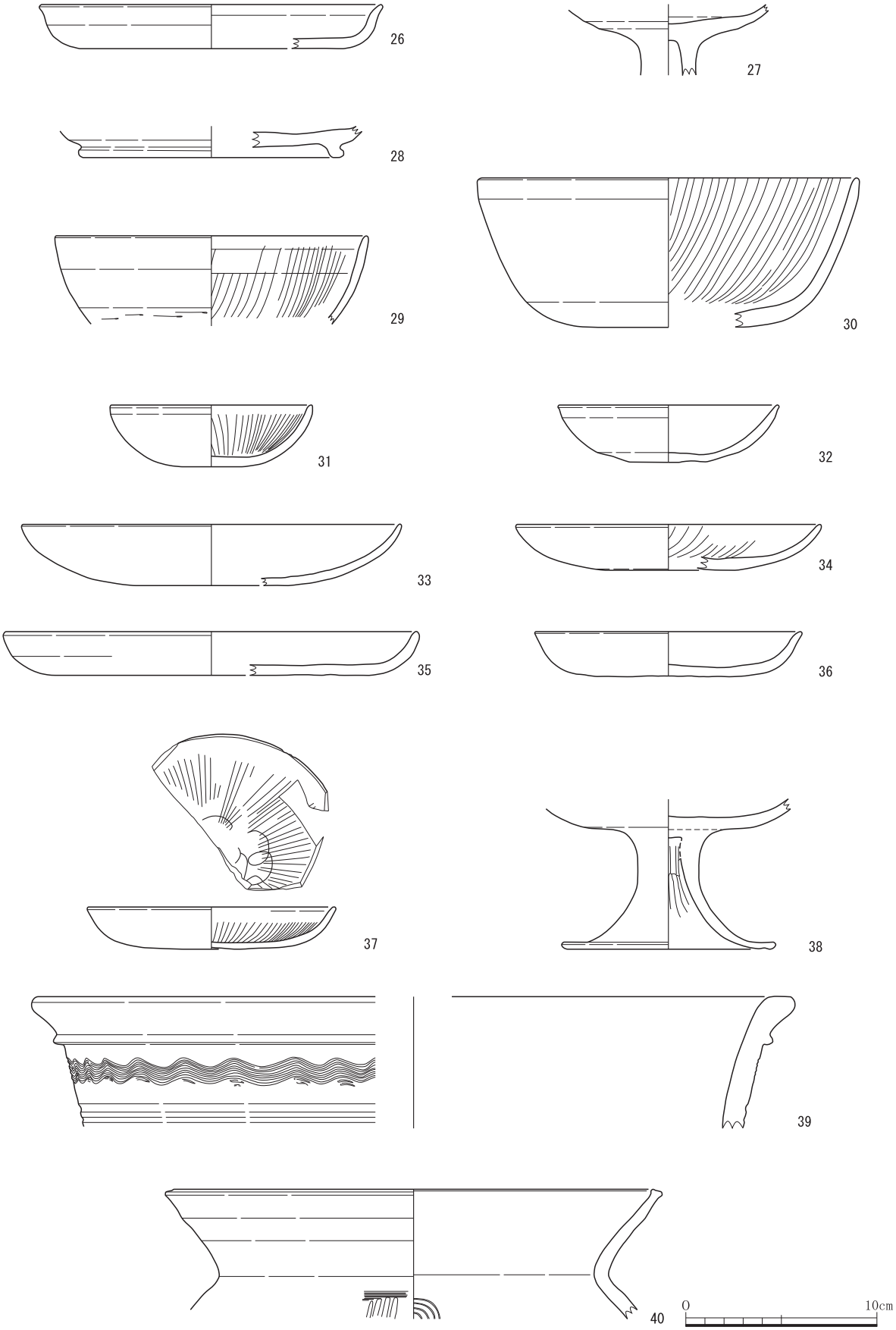


図186　土器②（S＝1/3）

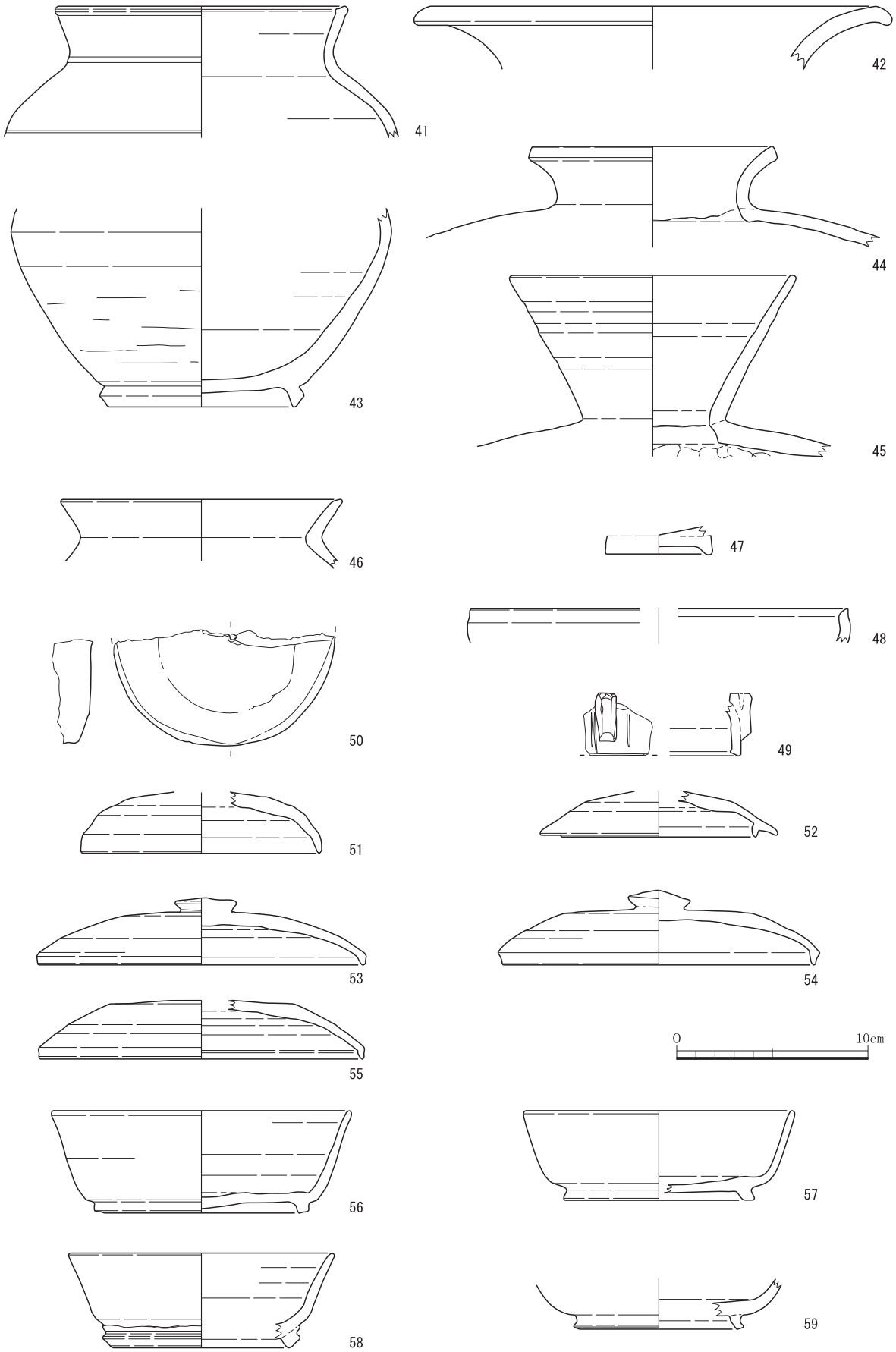


図187　土器③（S＝1/3）

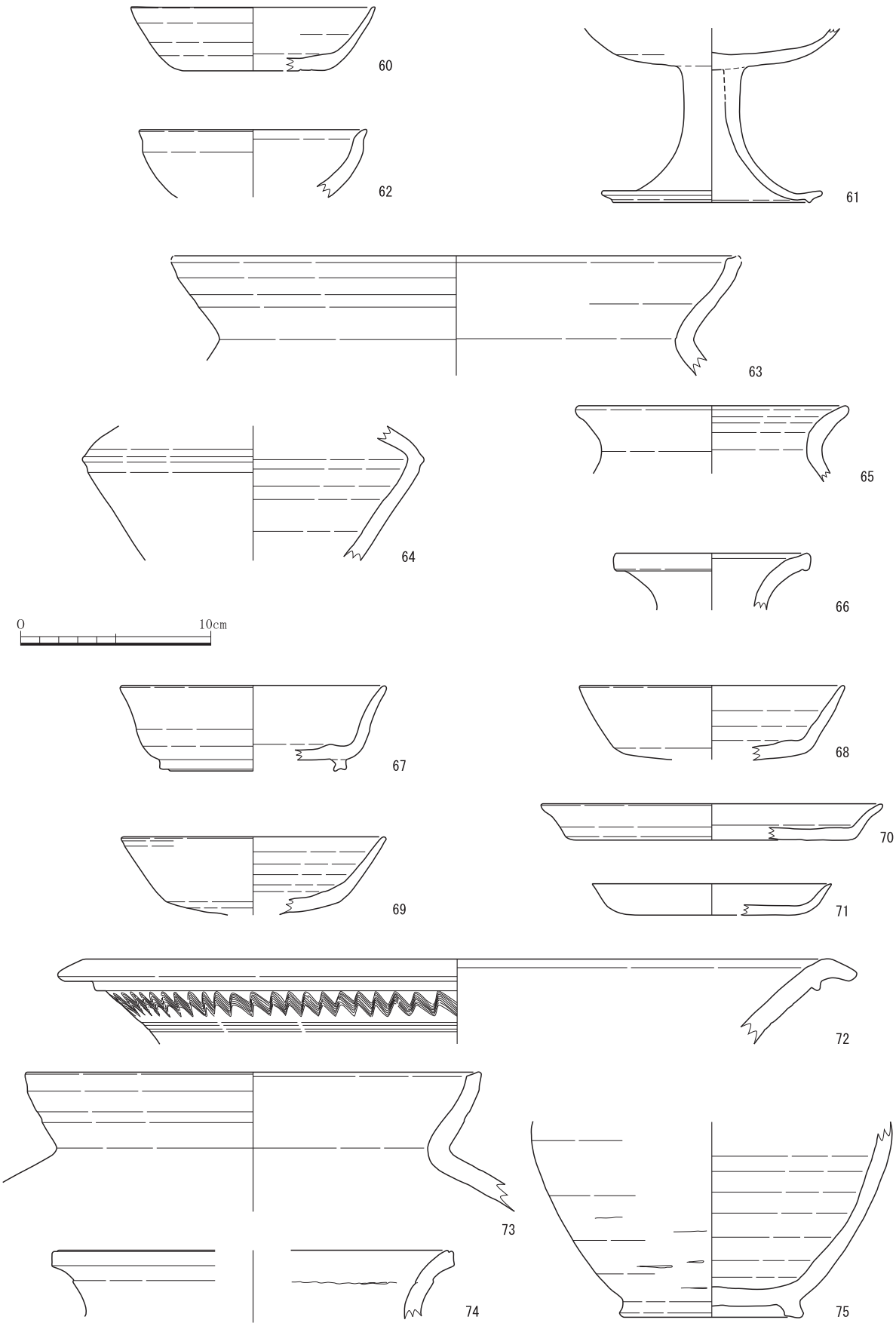


図188　土器④（S＝1/3）

表32　土器観察表

図版番号	出土地点	器種		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	径高指数	調整 外面	調整 内面	焼成	胎土	色調	備考
185－01	C8	須恵器	無台坏	14.9	12	3.5	23	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	良	密	灰色	
185－02	C7･8	土師器	無台埦	19.8	10	5	25	回転ナデ・不定方向ナデ	回転ナデ	良	密	明赤褐色	内外に赤彩
185－03	C8･9	土師器	有台埦	23.8	14.8	4.9	21	回転ナデ	回転ナデ	やや良	やや粗	橙色～淡灰色	
185－04	C8	須恵器	坏蓋					回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	良	密	灰色	
185－05	C8	須恵器	坏蓋	15.6		(1.4)		回転ナデ	回転ナデ	良	密	灰色	
185－06	B･C8	須恵器	坏蓋	15.8		3.2		回転ナデ	回転ナデ	良	やや粗	灰色	
185－07	C8	須恵器	坏蓋	16.8		3.15		回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	良	密	灰色	
185－08	C8	須恵器	坏蓋	13.2		2.5		回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	良	やや密	灰色	
185－09	C8	須恵器	坏蓋	13.4		(1.7)		回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	良	やや密	灰色	
185－10	C8	須恵器	有台坏	18.2	12.8	5.4	30	回転ナデ	回転ナデ	良	やや密	外）黒色　内）赤灰色	
185－11	C8	須恵器	有台坏		10	(5)		回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	粗	灰色	
185－12	C8	須恵器	無台坏	13.9		3.5		回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	密	灰色	
185－13	C8	須恵器	無台坏	13		3.75		回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	やや密	灰色	
185－14	C8	須恵器	無台坏	11.6	7.8	4.18	36	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	不良	やや密	にぶい橙色	
185－15	C8	須恵器	無台坏	12.7	8.2	3.4	27	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	良	やや密	灰色	
185－16	C7･8	須恵器	無台坏	12.1	6.7	4.38	36	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	良	粗	灰色	
185－17	C8	須恵器	無台坏	13.2	8.8	4	30	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	やや不良	密	灰白色	内面に黒漆付着
185－18	C8	須恵器	無台坏	12.2	7.4	3.2	26	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	良	やや密	暗灰色	
185－19	C8	須恵器	無台坏	12	7.8	3.8	32	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	良	密	灰色	
185－20	C8	須恵器	無台坏	13.1	9.6	3.65	28	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	やや不良	密	灰黄色	
185－21	C8	須恵器	無台坏	14.2	8	3.15	22	回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	やや密	外）暗灰色　内）灰色	
185－22	C8	須恵器	無台坏	13.7	8.4	3.45	25	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	良	密	淡灰色	
185－23	C8	須恵器	無台坏	12.8	8.2	4	31	回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	密	淡灰色	
185－24	C9	須恵器	無台坏	10.6	6.8	3.3	31	回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	やや粗	灰色	
185－25	C8･9	須恵器	無台坏	15		(3.9)		回転ナデ	回転ナデ	やや不良	密	灰白色	
186－26	C8･9	須恵器	無台皿	18	13.8	2.3	13	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	良	密	淡灰色	
186－27	C8	須恵器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	良	密	灰白色	
186－28	C8	土師器	有台坏		14.9	(1.7)		回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	密	赤色	全面に赤彩
186－29	C8	土師器	埦体部	16.4		(4.6)		回転ナデ	回転ナデ	やや良	密	にぶい黄橙色	内面に暗文
186－30	C8･9	土師器	無台埦	19.7	12	7.8	40	回転ナデ	回転ナデ	良	密	明赤褐色	内面暗文　内外面赤彩
186－31	C8	土師器	無台埦	10.6		3.2	30	摩滅により不明	摩滅により不明	良	密	橙色	内面に暗文
186－32	C8	土師器	無台埦	11.6		3	26	回転ナデ	回転ナデ	良	やや密	明赤褐色	全面に赤彩
186－33	C8･9	土師器	無台皿	19.9		3.2	16	回転ナデ	回転ナデ	不良	粗	にぶい黄橙色	
186－34	C8	土師器	無台皿	16		2.4	15	回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	やや密	明赤褐色	内面に暗文　全面に赤彩
186－35	C8	土師器	無台皿	21.8	17.8	2.3	11	回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	やや良	やや密	にぶい黄橙色	
186－36	C8	土師器	無台皿	14		2.3	16	回転ナデ	回転ナデ	良	密	明赤褐色	全面に赤彩
186－37	C8	土師器	無台皿	13		2.2	17	回転ナデ	回転ナデ	良	密	明赤褐色	内面に暗文　全面赤彩
186－38	C8	土師器	高坏		11.2	(7.9)		回転ナデ	ミガキ	良	密	淡橙色	
186－39	C8	須恵器	大甕	(39.4)		(6.9)		回転ナデ・波状文	回転ナデ	良	やや密	暗褐色	
186－40	C8	須恵器	甕	26		(6.8)		回転ナデ・タタキ→カキメ	回転ナデ・タタキ	やや良	やや密	外）赤灰色　内）暗灰色	
187－41	C8	須恵器	甕	15.3		(6.9)		回転ナデ	回転ナデ	良	やや密	青灰色	
187－42	C8	須恵器	広口壺	25				回転ナデ	回転ナデ	良	やや密	青灰色	
187－43	C7･8	須恵器	壺底部		10.7	(10.4)		回転ナデ	回転ナデ	良	密	青灰色	
187－44	C8･9	須恵器	横瓶	13				回転ナデ・タタキ	回転ナデ・タタキ	良	やや密	灰色	
187－45	C8･9	須恵器	長頸瓶	14.8		(9.5)		回転ナデ	回転ナデ・指頭圧痕	良	密	灰色	
187－46	C8	土師器	甕	14.7		(3.2)		回転ナデ	回転ナデ	良	やや密	にぶい黄褐色	
187－47	C8	黒色土器	有台埦		5.6	(1.5)		回転ナデ	回転ナデ	良	密	にぶい黄橙色	
187－48	C8	土師器	鉢	(20)				回転ナデ	回転ナデ	良	密	明赤褐色	全面に赤彩
187－49	C8	須恵器	円面硯			3.25		回転ナデ	回転ナデ	良	密	淡灰色	外面に自然釉　天井部に穿孔
187－50	C8･9	須恵器	円板					ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	やや不良	やや粗	灰白色	
187－51	C9	須恵器	坏蓋	12.4		3.2		回転ナデ	回転ナデ	良	密	淡灰色	
187－52	C7	須恵器	坏蓋	12.4		(2.4)		回転ナデ	回転ナデ	良	密	外）灰色　内）暗灰色	
187－53	C9	須恵器	坏蓋	17.2		3.5		回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	良	密	外）淡灰色　内）灰色	
187－54	C9	須恵器	坏蓋	16.3		3.9		回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ・一方向ナデ	良	密	灰色	
187－55	C9	須恵器	坏蓋	17		(3.2)		回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	良	密	外）黄灰色　内）灰色	
187－56	C9	須恵器	有台坏	15.7	11.2	5.3	34	回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	密	灰色	
187－57	C9	須恵器	有台坏	14.2	10	4.8	34	回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	やや密	灰色	
187－58	C9	須恵器	有台坏	13.9	10.3	4.95	36	回転ナデ	回転ナデ	良	密	外）灰色　内）暗灰色	
187－59	C9	須恵器	有台坏		8.8	(2.7)		回転ナデ	回転ナデ	良	やや密	暗灰色	
188－60	C7	須恵器	無台坏	12.8	7.3	3.35	26	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	良	密	灰色	
188－61	C9	須恵器	高坏		11.6	(9.2)		回転ナデ	回転ナデ・一方向ナデ	良	やや粗	外）淡灰色　内）黒灰色	
188－62	C9	土師器	埦体部	12		(3.6)		回転ナデ	回転ナデ	やや不良	密	灰白色	
188－63	C7	須恵器	甕	(30)				回転ナデ	回転ナデ	やや不良	密	灰白色	
188－64	C6	須恵器	瓶体部					回転ナデ	回転ナデ	良	やや密	青灰色	
188－65	C9	土師器	甕	14.4		(4)		回転ナデ	回転ナデ	やや良	やや粗	にぶい黄橙色	一部に赤彩痕
188－66	C9	灰釉陶器	口縁部		10.4	(3)		回転ナデ	回転ナデ	良	やや密	灰白色	
188－67		須恵器	有台坏	13.8	9.8	4.5	33	回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	やや粗	灰色	
188－68		須恵器	無台坏	13.8	10	3.9	28	回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	密	淡灰色	
188－69	B1	須恵器	無台坏	14	7.3	3.4	24	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	やや不良	密	淡赤褐色	
188－70	A･B5	須恵器	無台皿	18	14.2	1.9	11	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	良	やや密	灰色	
188－71		土師器	無台皿	12.6	9	1.65	13	回転ナデ・ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	やや良	密	淡橙色	
188－72	B4	須恵器	大甕	(42)		(4.5)		回転ナデ	回転ナデ	やや不良	やや密	にぶい橙色	
188－73		須恵器	甕	23.8		(7.3)		回転ナデ	回転ナデ	やや不良	密	淡黄灰色	
188－74	C6	須恵器	甕	(20.4)		(3.5)		回転ナデ	回転ナデ	良	やや密	暗灰色	
188－75	B3	須恵器	瓶体部		9.7	(10.3)		回転ナデ	回転ナデ	良	やや密	灰色	

３．小　結

本節では、遺物の年代を検討し、遺構の様相をまとめたい。出土土器の時期は７世紀初頭から９世紀代までのものが存在するが、７世紀中葉以前と９世紀代の土器は極めて少ない。そのため、これらを除外した時期を本調査区の主要時期と理解し、以下の方法で遺物の時期を検討する。

検討方法は、つぎのようにおこなう。まず、出土土器のなかでも数量・残存率が一定以上確保されているもののなかから、編年研究の中心である須恵器食膳具を選出し、そのなかでも時期の比定可能な有台坏蓋・有台坏・無台坏にひとまず資料を限定する。つぎに、その資料と越前・加賀の窯跡出土土器の型式とを比較することで、対応型式を特定する。その対応した型式に当該地域周辺の土器編年を用いて対応させることで時期の推定をおこなう。この個別土器の時期を把握したうえで、土器全体の様相としての時期的傾向を求める。それでは以下個別に検討していく。

有台坏蓋（図 185-６・７・図 187-53～55）は口径 16 ㎝前後の扁平形状のつまみが付く笠形形態が占める。口径・形態をみると桃の木山１号窯式に近似する。桃の木山１号窯式の形態的特徴として、前半期の口縁部端部で長く折り返すシャープな作りから、後半期には口縁部の短く丸く折り返しシャープさは退化するようになる。54 は前半期的特徴を備え、それ以外は後半期的特徴を備えると判断する。

有台坏（図 185-10・図 187-56～58）は体部が直線的に開き、口径 18 ㎝程度の高めの高台が付くＡ個体（10）と、口径 14 ㎝前後の低い高台が付くＢ個体（56～58）がある。Ａ個体の口径・形態は、口径 20 ㎝程度の高めの高台が付く丸みを帯びる体部立ち上がりをもつ戸津六字ヶ丘４号窯式に似ている。Ｂ個体は佐々生２号窯式（矢田野向山１号窯Ⅲ次窯）以降に出現する深身器形であり、二ッ梨横川窯灰原式段階の体部外傾器形と判断する。56 の深身・外傾度合はさらに後出する窯式の可能性がある。

無台坏（図 187-12～24）は椀形器形（12～19）と偏平器形（20～24）がある。椀形器形のなかでも底部接地面が小さく丸みをもつ個体（12・13）は７世紀の傾向と捉え湯屋Ｂ-１号窯段階と考えたい。口縁内弯形の無台坏は丸底と平底があり、深身の個体や口縁端部が外反する個体もある。他の椀形器形（14～19）は口径・傾向指数から桃の木１号窯Ⅱ次床段階と推定する。やや体部が直線的な個体（15）は後出する窯式の可能性もある。偏平器形は、口径・器厚・体部形状から 20 を佐々生１号窯（矢田野向山１号窯Ⅰ次窯）、21・22 を二ッ梨横川窯段階、23・24 を戸津 59 号窯Ⅱ次窯Ⅰ次床段階と推定する。

これらの窯跡の年代比定を、越前編年のなかでも歴年代の比定に有効な堀編年を用いておこなう。有台坏蓋は８世紀初頭（堀編年６期）、有台坏は７世紀末（同５期）・８世紀後葉（同９期）、無台坏は７世紀後葉～８世紀末（同４期～10 期）となる。また、数量的傾向から、７世紀末から８世紀初頭の時期と８世紀後葉の時期が多い。

つぎに、土師器食膳具の検討を行いたいが、越前地域においては出土数がそれほど多くなく、指標とするべき研究もほとんどないという問題がある。土師器の全国的な傾向としては、赤彩土師器は７世紀後半～８世紀初めに増加し、８世紀前半頃から器形が次第に須恵器の形に変化していくといわれている。この傾向をもとに、土師器食膳具を土師器器形と須恵器器形に分類する。

土師器食膳具のなかで、須恵器器形といえる個体は２点（図 186-28・38）である。このうち、高台部のみ残存する個体（28）は、時期の特定がしにくい。もう一方の高坏（38)は坏部が坏型であると推測できるため、逆蓋器形が出現する矢田野向山１号窯Ⅲ次窯の８世紀中葉後半以前の時期と考えられる。他に須恵器的なロクロ技法による個体が１点（図 185-３）ある。ただし、この土師器の有台埦（３）は、須恵器には認めにくい形である。埦型器形から８世紀初頭前後の時期と考えることもできる。

このように須恵器器形も数点認められるが、土師器食膳具の大半を占めるのは８世紀前半頃まで存在する土師器器形である。全国的な傾向として、７世紀後半～８世紀初めまでの時期において赤彩土師器が増加するようである。これら土師器器形の数量が多いことの一要因と考えることもできる。

以上の須恵器と土師器の年代を合わせ考えると、７世紀後葉から８世紀末までの連続する時期の土器のなかでも、７世紀末から８世紀前半までの個体が最も多く過半数を占める。また、これらの時期の土器は、器種や法量が多様な土師器も存在し約３割を占めることになるため、非常に多種多彩な様式を構成していたと考えられる。さらに、暗文を施すものは都の土師器を忠実に模倣しようとした結果であり、中央志向の表れと判断したい。このような土器の様相から、７世紀末から８世紀前半までが本調査区の最も栄えた時期といえよう。

本調査区の建物のなかでも、ＳＢ01は大型規模の建物である。遺構の節でも述べたようにＳＢ04が建て替えられたものである可能性が高い。調査区において、ＳＢ01廃絶以降には建物の造営が認められない。このような建物の造営状況は、土器の時期的様相とも関連するはずである。

ＳＢ01から出土した遺物を検討すると、須恵器無台坏（図185-１）は底部にケズリを施すことから、矢田野向山１号窯Ⅲ次窯の８世紀中葉後半の時期と一応理解したい。この時期は土師器の器形の転換後といえる。土師器の無台埦（図185-２）や有台埦（図185-３）は、この時期よりも古いものと考えられる。このような時期差は前節でも述べたように、柱の腐朽による陥没穴に上層の整地土とともに遺物が流入した可能性を補足するものと考えられる。そのため、ＳＢ01の時期を特定する遺物は存在しない。

ＳＢ01北側の柱穴群のみが存在するＣ８区の遺物について考えてみる。Ｃ８区の整地土からは、出土土器総量の６割強を占める土器が出土している。赤彩土師器はこの地区からしか出土していないため、整地土であっても遺物の散乱が一定範囲に限定できる。また、Ｃ８区に限定した場合には、７世紀末から８世紀前半の土器の比率はさらに高くなる。これらのことから、大型掘立柱建物ＳＢ01と７世紀末から８世紀前半の多様な土器群の関連性は高いと考えられる。

遺構の様相として、ＳＢ01に関連することをまとめると次のようになる。ＳＢ01を含む同方位の建物は、方位の同一性は同一の時期および計画である蓋然性があるため、一連の建物群と評価できる。この建物群のなかで、桁棟を揃えて並ぶ同一規格のＳＢ02とＳＢ03が存在することも計画性の高さを示唆する。この建物群の方位は足羽郡の条里制南北線N約２°Wとほぼ同じ方位である。このような方位について、８世紀前半代以降には地方官衙でも真北方位が多くを占めるようになり、これを官衙の造営計画に真北方位が組み込まれていたとする見解もある。これらのことから、ＳＢ01関連の建物群は、官衙的配置といえる。ただし、ＳＢ01の柱が抜き取られていないため、ＳＢ01廃絶後はその周辺が継続して利用されなかったことを示唆する。そのため、ＳＢ01より後の建物は存在せず、廃墟のような状態であったと推測できる。このように８世紀中に廃絶することは、直接的に官衙と判断しにくい状態である。

（釘谷）

参 考 文 献

堀　大介 2004「古代須恵器編年と歴年代－越前・加賀を中心に－」
『あさひシンポジウム 2003 記録集 山の信仰を考える－越知山と泰澄を深めるために－』朝日町教育委員会
望月精司 1994「南加賀古窯跡群における８世紀中葉の画期について」『北陸古代土器研究』第４号　北陸古代土器研究会
望月精司 1995「加賀地域における７世紀後半の須恵器・土師器生産」『北陸古代土器研究』第５号　北陸古代土器研究会
望月精司 2007「額見町遺跡出土の筆立て付円面硯について」『額見町遺跡Ⅱ』小松市教育委員会
小村　茂・宮下幸夫・望月精司 1991『那谷桃の木古窯跡　発掘調査報告書』石川県小松市教育委員会
山中敏史編 2003『古代の官衙遺跡』Ⅰ遺構編　独立行政法人　文化財研究所　奈良文化財研究所
山中敏史編 2004『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物・遺跡編　独立行政法人　文化財研究所　奈良文化財研究所